

■29 被災地で新聞にまつわる2題

その小2男児は全盲の両親の「目」だった。テレビの天気予報のマークを言葉で伝えるなどしていた。その子は昨年春、新聞を読み始めた。わからない字は、辞書を引いたり、両親に尋ねたり。津波後、母親と行方不明になっている。

宮城県気仙沼市の話だ。男児の目が見えると確認できた時、どれだけ両親はほっとしたか。新聞をとろうと決めた時はどんな思いだったのか。2人を探捜す父親の胸中想像すると胸が張り裂けそうだ。

同じ宮城県内の避難所に「ファイト新聞社」が誕生した。編集者と記者の計6人は全員小学生。モットーは「その日の一番明るい話題を書く」だ。本物の新聞が暗い話題ばかりだからだそう。支援に訪れた人も取材した。壁に張った紙面は周りの大人に好評だ。

特に津波被害は甚大で、1ヶ月を過ぎても復興の兆しは見えない。子どもにまつわる新聞の話題から、「本物」の役割とあるべき姿の一端が見えてくる(山)